



## 馬耳東風

東京駅丸の内駅舎が復元された。昭和20年5月の空襲で、焼夷弾の直撃をうけて炎上したが、戦後間もなく、三階建てが二階建て、円形ドームは角屋根となったが、可能な限り往年の姿に沿った復旧工事がなされて今日に至ったという。それが昨年（2012年10月）、大正3年（1914）創建当時の姿に復元された。私はここ十年ほど、この丸の内駅舎を見るたびにあることを思い出す。設計者は辰野金吾、この辰野金吾の臨終の様子をいつも思い出すのである。と言っても、当然のことながら、私が臨終に立ち会ったわけではない。長男である仏文学者辰野隆が、父親の死後間もなく書いた「終焉の記」という一文の抜粋を読んで知ったのである（出口裕弘著「辰野隆日仏の円形広場」新潮社）。それによると、辰野金吾は枕頭に肉親等と呼び、妻の手助けによって半身を起し、まず妻に良き妻、良き母親であったことを謝したのち、集まった一人一人にもお礼を述べた後、万歳をしたというのである。原文では、「…今生の好誼を謝し、謝し了つて双手を翳して万歳を連呼す。…」とある。死の床にある人間が、病床に半身を起し、両手を挙げて万歳を連呼する。信じがたいことではあるが、信じざるを得ない文が後に続いている。辰野金吾は刻苦勉強の人であったという。ビリで入学しトップで卒業して、後には帝国大学工科大学長になったという。「精いっぱい生きてきて、何も後悔することはない、わが人生万歳」ということだったのである。まことにうらやましい死に際である。どういふわけか東京駅に来るたびにこのことが頭をよぎるのである。

うらやましいと言えば、「ねがはくは花のもとにて

春死なん そのきさらぎの望月のころ」とうたった西行は、それから十数年後、願いどおり文治6年（1190年）2月16日、満月の日に臨終を迎えたというが、これも非常にうらやましい。当時の人々もたいそう驚き、藤原俊成は「願ひ置きし花の下にて終りけり蓮の上もたがはざるらむ」とうたったという。それはそうだろう。願いどおりに死ぬるなんてことは稀有のことなのだから。

うらやましい話ではないが、すごいと思うのは忠臣蔵でおなじみの浅野長矩である。殿中で刃傷におよび即日切腹となった長矩が、「風さそふ 花よりもなほ われはまた 春の名残を いかにとやせん」とうたったというが、これから切腹しなければならぬ人間が、よくもマアこんな穏やかな辞世が残せたものである。

さて自分のことである。自分はどうのような死に方をするのであろうか、イヤどどのような死に方ができるのであろうか。どう考えても、「わが人生万歳」とは言えないし、風流な願いなど及びもつかないし、辞世の和歌なんて到底つくれるわけではないし…。

ゲーテの最後の言葉「光を…もっと光を」はあまりにも有名だが、これは美人の夢を見て、その美人の顔が暗がりによく見えないので、もっとよく見たいと思い、「鏡戸をあけなさい。光を。…もっと光を…」と言ったのだそうである（クロード・アヴリーヌ著・河盛好蔵訳「人間最後の言葉」ちくま）。80歳を越えて若い女性（少女）に恋をしたという、いかにもゲーテらしい言葉と言えるかもしれない。しかし、世界の文豪ゲーテ様には誠に申し訳ないが、この種のことなら私にも言えそうである。ワインの瓶に囲まれた夢を見て、「そちらの瓶を開けなさい。そう、それを、…ワインを、…もっとワインを…」

(久)